

◎特別寄稿

## 中也さんの肖像

長野まゆみ

## 中原中也と

## トリストラン・コルビエール

小澤 真

◎テーマ展示

「中也の本棚—日本文学篇」

◎特別企画展

「書物の在る処

—中也詩集とブックデザイン」

◎企画展

「中也、この一篇—「正午」

「雑誌「詩園」

—中也・山頭火と山口の文学青年たち」

◎新収蔵資料紹介

西川マリエ宛献呈署名入り『山羊の歌』

谷崎潤一郎宛献呈署名入り『山羊の歌』

◎記念館ニュース

山口ゆめ回廊博覧会 文学ラリー・ゆめ散歩

ぼうしの詩人賞

詩の創作ワークショップ

主なできごと(2021年度行事記録)

第27回中原中也賞

2022年度行事予定

# 中原中也記念館

# 館報2022

# 27

Public relations magazine

第27号

Nakahara Chūya  
Memorial Museum

# 中也さんの肖像

長野 まゆみ



中原中也 18歳頃

そのひとが何者であったのかを知るよりさきに、添えられた肖像写真に気をとられてしまうことはよくある。わたしもふくめて、中也さんとそんなふうに出逢ったひとが、世の中にはたくさんいるにちがいない。しかも、十代ではたいてい国語の授業のひとつまだ。

「一つのメルヘン」という詩の作者略歴に、「黒い帽子をかぶった夢みがちな少年——孤独を遣つれに——」とでもタイトルをつけたくなるような顔写真がそえてある。たちまち、軽薄女子のあたまのなかでは、勘ちがいが起こる。「なるほど、このひとがこの詩を書いたのか」と少年時代の中也さんがつくった詩のように錯覚する。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、  
淡い、それでゐてくつきりとした  
影を落としてゐるのでした。

「一つのメルヘン」

ガラス絵のような透明感のある光景が目につかぶ。思春期の生徒であればこそ、透明は孤独の類語であることを直感する。しかし、もちろんこの詩が作者の最晩年の作で、不毛と空虚にとらわれ、からだにぼっかりと空いた穴を風がふきぬけていたところにつくられた、という事実は知らない。それでも、ことばから立ちのぼる哀しみの印象と顔写真を結びつ

けて、中也さんの名前を記憶した。

ほかの詩も読んでみたくなり、学校の図書室へ向かった。全集をみつけ、その一巻をひらく。口絵でまたあの写真と出逢う。ページいっぱいには拡大された写真の中也さんの目はいつそう大きく哀しそうにみえた。

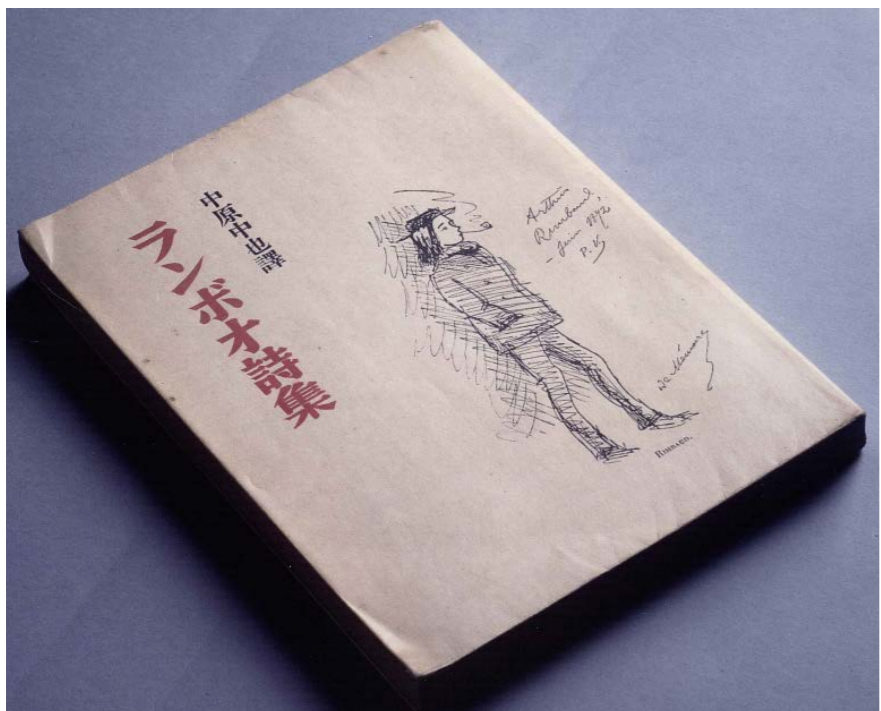
中也さんが十八歳のときの肖像である。詩壇へ殴りこむような勢いで上京した中也さんには哀しんでいる閑などなかったろうし、目でものを云うタイプでもなかったろう。口もだす、手もだすひとであったことを伝記者は書く。

略歴欄の小さな写真ではわかりにくいのが、口絵の中也さんはお河童あたまだ。ここで、誤解はさらに増した。「小公子」などを通じて、お河童あたまは少年の髪型であると理解する十代女子——しかも、まだランボーを知らない——は、このひとは〈永遠の少年〉を目ざしたのだろうか、思いこんでしまうのだ。

全集の一番目の詩が「トタンがセンベイ食べて」ではじまるのも、マザーグースの一篇のように思われ、共感をもった。詩も小説も、読者の誤読と偏愛によってなりたつものだ。だから、

誤解が悪いわけではない。

ただ、このころは中也さんの家の庭先で咲いた花を〈おや、可愛らしい花〉とながめて、「ゆあーんゆあーんゆあーん」などのおぼえやすい語句を口ずさむだけで知ったつもりになっていた。ごめんください、とその家を本式に訪ねることなく通りすぎてしまった。十代では、どうしても限界がある。表面にやらんだ道具立てのみを見ている。バックヤードのことなど思うゆとりはない。



中原中也訳『ランボオ詩集』表紙

中也さんというひとが、少年の姿をした「おっさん」だったことや酒癖の悪さ、むやみに喧嘩をふっかけるひとであったことなどの伝記的エピソードを知るのは、ずっとのちのことだった。

黒い帽子にだぶついた黒いマントを着こんだ姿は、「ヴェルレーヌが描いたランボオの像の扮装」なのだと河上徹太郎さんが明かしている。

つまり、いまで云うところのコスプレだったのだ。ランボオの詩に心酔した当時の青年たちは原書や英語訳を読んだのだが、当然和訳もあるべきだと考えた。中也さんもそのひとりとして翻訳をこころみた。

「ごらん、柳のむかふを水は、  
湿つたお城のぐるりをめぐつて  
ずうつと流れてゐるでせう。」

「渇の喜劇」

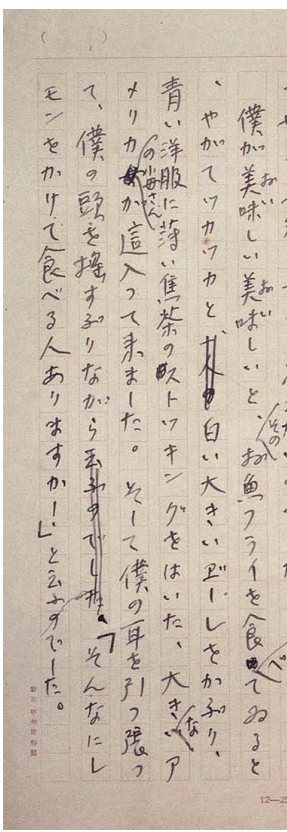
「お城」という語が中也さんらしい。子どもに語りかけるような口ぶりを紛れこませる巧みさは、ほかのだれにも真似のできない中也さんの特徴だ。また、子どものごとく景色のなかの際立つフォルムを瞬時に切り抜く「直感的な眼」が際立つ。夜の街角の洒落男たちを描写した詩がある。群歩く男たちの白くみえるところだけをとりえて「イカムネ・カラア」とする。アニメーションのような鮮やかさだ。

すことなく亡くなったことを惜しんだ。  
そのころ、中也さんは「永遠の失恋状態」と決別して結婚し、所帯をもった。子どもも生まれた。賢治さんを追悼しつつ、自分でも童話を書いてみる気になったようだ。本人が「童話」と注記しているから童話として全集におさまっているが、子どもが読んで共感できるかどうかはあやしい。ただ、ここでも名詞に「お」をつけることばの感性がきわだっていて、わたしはこの作品がとても好きだ。

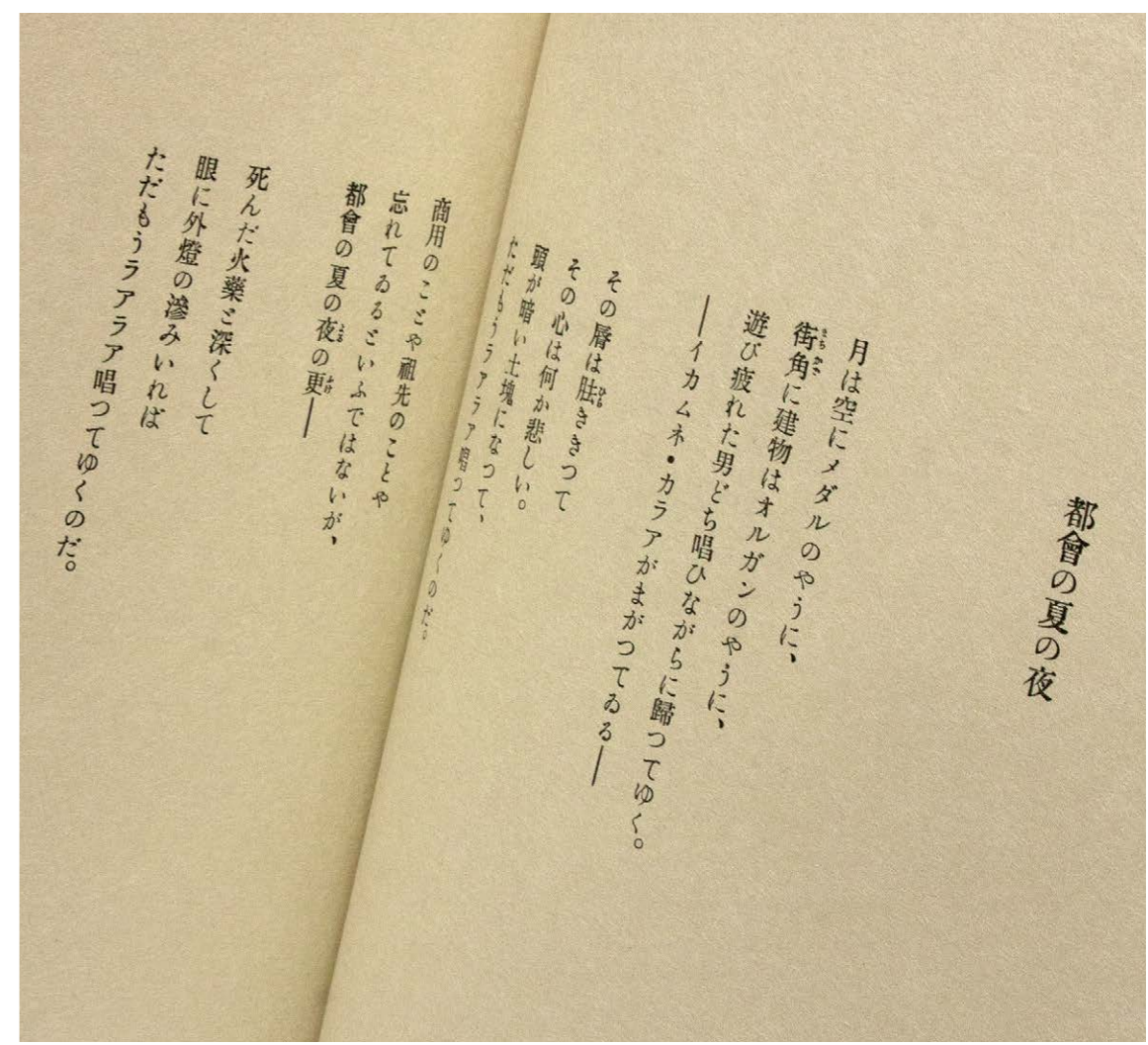
僕が美味しい美味しいと、そのお魚フライを食べてみると、やがてツカツカと、白い大きいゾレをかぶり、青い洋服に薄い焦茶の味、大きなアメリカのストッキングをはいた、大きなアメリカの母親さんが這入つて来ました。そして僕の耳を引つ張つて、僕の頭を揺すぶりながら、「そんなにレモンをかけて食べる人ありますか！」と云ふのでした。

「夜汽車の食堂」

われは料亭にありぬ。  
酒酌みでありぬ。



中原中也「夜汽車の食堂」原稿1枚目



中原中也「都会の夏の夜」(『山羊の歌』)

直感により、見るべきものだけを見る視力を、子どもや画家は特権的にもっている。中也さんにもそれがあつた。だからこそ、ゴッホにも共感したので。印象の先にある視覚表現を先どりしていた。

これに先立つ場面で、「僕」は「お魚フライ」にレモンの汁をしたたか掛けている。レモンと黄金の衣の対比が目につく。列車の食堂は白いセロロイドで、「餡色の電燈は、カツカと明つて燈つて」いる。だからこそ「お魚フライ」はかくべつに美味しそうなのだ。

中也さんはこの夜汽車を「円筒形の、途方もなく大きい列車が、まるで星に向つて放たれたロケットのやうに、遮二無二走つて行くのでした」と書いている。

すると「僕」が乗っているのは銀河鉄道なのだ。それは賢治さんの場合とおなじく、黄泉を旅する汽車である。そのうち眠くなった「僕」は自宅の陽だまりの庭の夢を見る。ジヨバンニがそうであつたように、「夢みる少年」の夢は醒めない。中也さんも、ひとりになる。

長門峡に、水は流れてありにけり。  
寒い寒い日なりき。

「冬の長門峡」

われのほか別に、  
客とてもなかりけり。

水は、恰も魂あるものの如く、  
流れ流れてありにけり。  
やがても密柑の如き夕陽、  
欄干にこぼれたり。  
あゝ！——そのやうな時もありき、  
寒い寒い 日なりき。

中也さんの大きな目は陽を映して潤んでいたのではないかと思う。ひとは皆、いざれひとり旅をする。わたしもそれを、心におさめる。

長野 まゆみ Nagano Mayumi

東京生まれ。1988年『少年アリス』で文藝賞受賞。2015年『冥途あり』で泉鏡花文学賞、野間文芸賞受賞。『テレビジョン・シティ』『猫道楽』『鳩の栖』『筆筒のなか』『チマチマ記』『デカルコマニア』『ささみささめ』『団地で暮らそう!』『兄と弟、あるいは書物と燃える石』『フランダースの帽子』『銀河の通信所』『さくら、うるわし』『カムパネラ版銀河鉄道の夜』『45' ここだけの話』などがある。  
近著は『その花の名を知らず』『長野まゆみの偏愛耽美作品集』  
公式HP <https://www.mimineko.co.jp>  
公式Twitter 耳猫風信社

# 中原中也とトリスタン・コルビエール

小澤 真

中原中也の詩を愛読する人にはそれぞれの中也がいるだろう。中也のどこに惹かれるのかは実に千差万別だ。私にとつては、詩の内側と外側の軋み<sup>1</sup>とでも言おうか。中也の詩は歌うようなリズム、音楽性が美しく、心地よい。でありながら、その内容はときに自嘲、自虐、冗談めかした苦い笑い、悲哀を伴っている。その落差が悲しげでありながら剽軽<sup>ひょうけい</sup>な、何とも言えぬ情感を引き起こす。

ところで中也が憧憬を抱いた詩人に、アルチュール・ランボーがいる。ランボーやまたポール・ヴェルレーヌといったフランスの詩人たちに大きな影響を受けていることはよく知られるところだ。ランボーの後期韻文詩などは、歌謡的な詩であり、中也の詩の音楽性に近いかもしれない。

中也は他にもフランスの詩人の作品をいくつも訳しているが、そのなかにトリスタン・コルビエールも含まれている。コルビエールはランボーと並び「呪われた詩人」とヴェルレーヌによって称され

た詩人である。生前に「黄色い恋」という邦題でも知られる詩集「アムール・ジョーヌ」を残し、若くして亡くなった。ブルターニュの詩人であり、海の詩人、また「ひきがえる」の詩人としても知られる。中也はコルビエールを紹介する短い記事ものしており、それなりの関心があったことがうかがえる<sup>2</sup>。

ところが、コルビエールの詩には、中也のごとき口ずさむような音楽性とは無縁の作品も多い。かろうじて韻文で書かれている、ほとんど偽の、擬の、戯の韻文である。韻律の規則を守っているように見えるが、口語的な言い回しを多用し、普通では考えられない音綴<sup>おんてつ</sup>の数え方をすることもある。造語の多さも韻文のパロディであるかのような印象を強める。

それでも彼には抒情性に溢れる詩群が存在する。とりわけ「のちのためのロンデル」の章に所収される詩群だ。ロンデルというのは Rondó という定型詩の古い形で、旋回するようなりフレインを伴

は消えた。——ここにはもう、門番もいない、  
ただ北風が、南風が  
聖母の糸を揺らしにくる。

しっ！ ろくでなしには、お前の土は呪われている。

——おやすみ！ 眠れ。お前のろうそくの終わり……

そして、この「のちのためのロンデル」のテーマは、子守唄である。ただし、子供は不在だ。子守唄を聞くべき子供、それはまた詩人自身のことでもあるのだが、彼は死んでしまったことが暗示される。つまり、死んだ自分に対して、詩人自身が歌う子守唄なのだ。

ここに、中也とコルビエールに共通するテーマがあるのではないだろうか。そもそも「在りし日の歌」というタイトルは愛児の死だけでなく、自分の死についても含むところがあるだろう。大岡昇平が言及したように「死んだ子供」と自己の同視がある<sup>3</sup>と考えることもできる。「骨」や「秋」などに見られる中也の詩における「死んだ僕を見ている」という状況は、コルビエールもよく好んだ視点である。彼は詩人である自分の「墓碑銘」を、おどけた風情で歌っている<sup>4</sup>。

また、コルビエールの「かわいそうな

う。この章の詩はこの形式で書かれており、詩集の他の詩篇とは音楽性という意味でも一線を画す。円環を描くような繰り返しの詩行はまさに中也のそれを思わせる。「よい子は、おやすみ……」という詩を拙訳から引用したい<sup>5</sup>。

よき晩で！ 眠れ、お前のろうそくの  
終わり……

そこへ置いて、いつてしまった。

ひとりでもこわくはないよね、かわい  
そうな坊や？ ……旅籠の褥の燭台だ。

もう恐れることはない、写字生のむち  
など、

さあ！ ……お前を起こしはしないから。  
よい晩を！ 眠れ、お前のろうそくの  
終わり……

少年<sup>6</sup>という詩は、死んでしまった少年

について、第三者（おそらく女性）が語るという体裁の詩である。この少年は詩人の比喩でもある。中也の「秋」を想起させるような詩と言える。

実際のところ中也がどの程度コルビエールを読んでいたのかは不明である。フランス詩の影響を考えるなら、まずランボーやヴェルレーヌ、あるいはボードレールやネルヴァルの名が挙げられるだろうが、しかし中也の詩はそれらに似ているかといえば、必ずしもそうではないだろう。たとえばランボーの言葉の錬金術のような壮大な言語実験の意図、小林秀雄が評するところの「聊かの感傷の痕も持たない<sup>7</sup>」という詩風は中也のそれとは異なる。むしろコルビエールの自嘲的で、おどけた苦笑いを含んだ哀歌、それも死んだ子供を自分と重ねながら悼む歌は、奇しくも中也と響き合うのではないだろうか。

の要旨をまとめたものである。

3 コルビエール、前掲、四六三〜四六四頁。

4 大岡昇平「『在りし日の歌』『中原中也』講談社、一九八九年、二四七頁。

5 コルビエール、前掲、三四〜四〇頁。

6 コルビエール、前掲、一一一〜一二二頁。

7 昭和八年十一月十日付安原喜弘宛書簡にはコルビエールに言及があるが、極めて限られたものである。『新編中原中也全集』第五卷、二〇〇三年、角川書店、四五六〜四五九頁。

8 小林秀雄「ランボー」『小林秀雄全集』第一卷、新潮社、二〇〇二年、八九頁。

Ozawa Makoto

小澤 真

1977年千葉県生まれ。フランス・ナント大学大学院文学・言語・コミュニケーション研究科文学系専攻修士課程修了。大阪府立大学(2022年度より大阪公立大学)講師。現在は社会福祉学(日仏比較)、フランス語教育を中心に研究している。大阪府立大学の公開講座「ABCから学ぶフランス語」にて一般の方を対象にフランス語の普及活動も行っている。主な著書は「日常フランス語会話ネイティブ表現」(語研、共著)など。

Nakahara Chūya et Tristan Corbière

# 中也の本棚 ——日本文学篇

令和4年2月16日「水」〜令和5年2月12日「日」



中原中也は読書家でした。中也の本棚にはどんな本が並んでいたのでしょうか？

中也の蔵書の多くは失われていますが、日記や書簡には読書についての記述が多数残され、中也が読んでいた本を知ることができます。中也は高橋新吉、宮沢賢治、佐藤春夫などを愛読し、詩のほかにも幅広いジャンルの本を読んできました。その読書体験は、中也が詩人として成長していく道のりを支えていたもののひとつであるといえるでしょう。

本展では、中也が読んだ本、中也による書評などを通じ、中也が受けた文学的影響や同時代の文学について紹介しました。

## 展示1 中也が愛読した詩人たち

中也は30年の生涯のなかでたくさんの本を読み、29歳の日記に「俺は今日迄に五六千冊は読んである」と記しています。読書記録にはフランス文学を中心とした外国文学の本が目立ちますが、日本文学

のなかで大きな影響を受けたのが、高橋新吉と宮沢賢治です。このほか、昭和2年の「新文芸日記」には、佐藤春夫、岩野泡鳴の名がしばしば登場し、高く評価していたことがわかります。

ここでは、中也が愛読した詩人たちと、中也の作品に見られるその影響を紹介しました。

### 《主な展示資料》

高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』、宮沢賢治『春と修羅』『宮沢賢治全集』全3巻、佐藤春夫『退屈読本』、中原中也原稿「星とヒエロ」「夜汽車の食堂」、中原中也「ノート1924」、正岡忠三郎宛中原中也封書（昭和3年1月「推定」7日付）

## 展示2 中也の書評

中也は詩人としての活動のなかで詩集などの評論を発表しています。中也の書評には、作者のとなりについて、言及が多く、中也が作品を通じて作者の本質を見ようとしていた姿勢がうかがえます。

また、日記などに記された感想などからは、中也があまり知られていない詩人たちの本や地方の同人誌も丁寧に読んでいたことがわかります。

ここでは、中也による書評や、本の感想を紹介しました。

### 《主な展示資料》

萩原朔太郎『無からの抗争』、草野心平『母岩』、若山牧水『牧水歌集』、「羅針」第10号、安原喜弘宛中原中也葉書（昭和7年2月29日）、竹下彦一宛中原中也葉書（昭和12年9月23日付）

## 展示3 中也詩集を愛蔵した人々

中也の詩集もまた多くの人々の本棚に並び、愛読されてきました。

ここでは、中也詩集を蔵書として大切にしていた人物として、仏文学者・鈴木信太郎、中也の友人・安原喜弘、高森文夫を紹介しました。

### 《主な展示資料》

『鈴木信太郎全集』第5巻、中原中也『山羊の歌』在りし日の歌、中原中也訳『ランボオ詩集』《学校時代の詩》特製本（安原喜弘宛献呈署名入）

## 中也の本棚

ここでは、中也が読んだ本の数々を紹介しました。

### 《主な展示資料》

中也が鎌倉の家で使用していた本棚、中原中也原稿「（無題）（自体、一と息の歌）」、佐藤春夫『佐藤春夫詩集』、三富朽葉『三富朽葉詩集』、高橋新吉『ダダ』、辻潤『すべら』



# 書物の在る処

## ＝中也詩集とブックデザイン＝



詩集には美しくデザインされた本が数多くあります。詩人たちは詩集を通じて自らの作品世界を表現するために、装幀にさまざまな工夫を凝らしてきました。

中原中也の詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』、3冊のランボー翻訳詩集もまた、高村光太郎、青山二郎、秋朱之介らといった、個性豊かな装幀家、出版人の手によってかたちづけられました。それらの佇まいには中也と装幀家それぞれの思いが映し出されています。

本展では、中也と装幀家たちとの関わりや彼らの美意識、そして大正から昭和初期にかけて出版された詩集のブックデザインを紹介しました。

### 展示1 『山羊の歌』

——中也の詩集づくり

昭和9年に刊行された中也の第一詩集『山羊の歌』。その装幀を手掛けた人物は、詩人で彫刻家の高村光太郎です。中也が詩集の編集に着手したのは昭和7年でしたが、刊行にこぎつけるまでに約2年半の年月がかかりました。資金の不足、出版社がなかなか決まらないことなどがその大きな原因ですが、その間、詩集の装幀においても紆余曲折がありました。

展示1では、装幀からみる『山羊の歌』刊行までの変遷を辿りました。

《主な展示資料》  
中原中也『山羊の歌』、『山羊の歌』校正刷り、『山羊の歌』印刷紙型、青山二郎『山羊の歌』装幀図案、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和7年9月23日付）／昭和9年9月18日付、高村光太郎装幀本（『宮沢賢治全集』、長谷川時雨『きもの』他）

### 展示2 三冊の翻訳詩集

——昭和初期の限定本出版

中也にとって初めて出版された著作は翻訳詩集『ランボオ詩集（学校時代の詩）』でした。装幀者は秋朱之介で、当時、出版元の三笠書房に勤める編集者であり、数々の出版社で限定本出版に関わった人物でした。その後、中也は2冊のランボオ翻訳詩集『ランボオ詩抄』、『ランボオ詩集』を刊行しますが、これらも山本武夫（山本書店）、野田誠三（野田書房）という、文芸書の限定本出版に高い理想を掲げた出版人たちが手がけていました。

展示2では、中也の翻訳詩集の背景にある、昭和初期の限定本出版について紹介しました。

《主な展示資料》  
ランボー／中原中也訳『ランボオ詩集（学校時代の詩）』、『ランボオ詩抄』、『ランボオ詩集』、中原中也『ボン・マルシェ日記』、中原中也翻訳原稿「感動」、秋朱之介装幀本『佐藤春夫詩集魔女特装本』、ラディゲ／堀口大学訳『ドニイズ』、内田百閒「創作集 冥途・再刷版」他、江川書房・野田書房の本（嘉村礒多『途上』、小林秀雄『ランボオ論』他）



### 詩人と装幀

詩人にとって自らの詩の世界を「詩集」としてかたちに表すための装幀は、作品と表裏一体をなす重要なものです。

このコーナーでは中也と同時代の詩人たちが装幀について語った言葉と、主に大正から昭和初期に刊行された個性豊かな詩集の装幀の数々を紹介しました。

#### 《主な展示資料》

北原白秋『思ひ出』、萩原朔太郎『月に吠える』、室生犀星『抒情小曲集』、宮沢賢治『春と修羅』、堀口大学『月下の一群』、萩原恭次郎『死刑宣告』、草野心平『第百階級』、立原道造『暁と夕の詩』

### 展示3 『在りし日の歌』と青山二郎

中也の第二詩集『在りし日の歌』は、中也が30歳の若さで亡くなった翌年の昭和13年、小林秀雄ら友人の手により刊行されました。装幀は詩集出版の世話人でもあった青山二郎によるものです。手書きの文字を活かした大胆なデザインは、青山の装幀本のなかでも傑作とされています。

展示3では、青山がのこした装幀関連資料から、青山の装幀の魅力やその創作の秘密に迫りました。

#### 《主な展示資料》

中原中也『在りし日の歌』、青山二郎装幀原画（阿部知二「旅人」、小林秀雄「Xへの手紙」、大岡昇

### 特別コーナー

#### 中也の詩集をいま作るなら……

中也の詩集『山羊の歌』と『在りし日の歌』が現代に出版されるなら、どのような装幀の詩集になるでしょうか？ 現代に生きる装幀家、詩人、アーティストらが中也の詩の世界を新たな視点で捉え、今なおお色あせることのないその魅力を、『詩集』という形によって表現しました。

#### 《参加メンバー》

岡本啓（詩人）、カニエ・ナハ（詩人、ブックデザイナー／本展監修者）、佐野裕哉（グラフィックデザイナー）、ゾエ・シレンバウム（アーティスト）、鈴木啓二郎（現代美術作家、秦博志（資料修復家）





「丸ビル正面」『日本地理風俗体系』第2巻、1931年、新光社



「丸ビルの壮観」(戦前の絵葉書)

中也、この一篇  
「正午」

会期 令和3年4月14日〔水〕〜7月25日〔日〕

中也の代表作をじっくりと味わう企画展シリーズ、「サーカス」「帰郷」に続き3回目となる本展では「正午」を取り上げました。

「正午」は副題に「丸ビル風景」とある通り、詩の制作当時、日本最大のオフィスパイルだった「丸ノ内ビルヂング」、通称「丸ビル」が舞台となっています。中也は、ここで働く大勢の人々が、昼休みを知らせるサイレンを合図にして一斉に外出する様子を、少しおどけた言葉とリフレイン(繰り返し)の技法を巧みに用いて描き出しています。

本展は「正午」について、「丸ビル」「サイレン」「月給取」をキーワードとして、詩の魅力が多面的に紹介しました。

展示1 「正午」

展示1では、中也の友人で作家の大岡昇平が、東京に別れを告げる中也の思いを「正午」から読み取っていることなどを紹介しました。

「正午」の原稿を「文学界」に送ったと推定される昭和12年8月中旬頃、中也の第二詩集『在りし日の歌』の編集作業は終了していたと思われます。同じ頃に中也が雑誌に発表した詩は他に2篇ありますが、そのうち、『在りし日の歌』に収録されているのは「正午」だけです。大岡昇平はこのことを踏まえて、「東京駅頭の丸ビルを歌った「正午」だけ、『在りし日

の歌』の中から発表したのは、東京との別れの意であろうか(「神と表象としての世界」という見解を述べています)。

展示2 丸ビルとサイレン

展示2では、「丸ビル」と「サイレン」はどちらも関東大震災から復興した東京の象徴だったこと、サイレンは、時局の変化により役割が変わっていったことなどを紹介しました。

昭和4年、正午を知らせる音が午砲からサイレンに変わりました。翌年には丸ビル屋上にサイレンが設置され、丸ビルとサイレンは連想的につながるようになります。昭和8年から毎年実施されるようになる防空演習では、サイレンが空襲警報の装置として使われました。昭和12年4月、防空を日本国民の義務とする「防空法」が成立し、「正午」の発表と同月である10月に繰り上げ施行されました。中也が「正午」を発表した頃、サイレンは時報から空襲警報へと、その役割が変わりつつありました。

展示3 月給取り

展示3では、文学作品における丸の内  
の月給取りの描かれ方について、また、  
生涯月給取りの生活とは無縁だった中也

と、月給取りに代表される世間の人々との関係について紹介しました。

「正午」が書かれた昭和初期において、「月給取」は、丸ビルやサイレンと同様、当時のモダン文化を象徴する語でした。中也は生涯月給取りにはならず、詩をつくることを人生の第一義とする生活を続けました。詩「黄昏」では「(竟に私は耕やさうとは思はない!)」といたい、「芸術論覚え書」では、詩人(芸術家)を別格の存在としています。しかし、その信念を貫こうとすることで生じる世間との軋轢に苦しみました。日記に書かれた随想の断片には(月給取)に対する複雑な感情が綴られています。

【主な展示資料】中原中也原稿「初夏の夜に、おもへらく」「十二月の幻想」「地上組織」「芸術論覚え書」、中原中也日記「千葉寺雑記」「文学界」昭和12年10月号、「文芸汎論」昭和12年10月号、赤星陸治「安全第一ビルヂング読本」



# 雑誌「詩園」

しえん

中也・山頭火と  
山口の文学青年たち

会期

令和3年9月29日「水」〜令和4年4月17日「日」



います。戦時色が深まる中、同人たちは主に詩の創作に力を入れ、個人で詩集を刊行した者もいました。

また、「詩園」は「誌友」といわれる寄稿者を募り、一般の購読者にも広く投稿を呼びかけました。ハンセン治療養所・長島愛生園の入所者の作品も掲載し、その中には、のちに詩人として知られる志樹逸馬きいつまもいました。

展示2では、当時の時代状況なども鑑みながら、同人たちがどのような雑誌を創ろうとしていたのか、「詩園」の内容に詳しく迫りました。

## 展示3 中原本中也顕彰

「詩園」では、中也の遺稿を掲載したほか、中也の年譜を作成したり、一周忌に有志を募って墓参を行ったりしました。これらの活動は、中原本中也の研究や顕彰活動の先駆けだとされていますが、それを可能にしたのは、弟の呉郎をはじめ中原家の支援があったからだといわれています。

展示3では、中原家と同人たちとの関係を探りながら、中也が「詩園」でどのように紹介されていたのかを取り上げました。

## 展示4 種田山頭火との交流

「詩園」の同人たちは、昭和13年頃から、山口市小郡の其中庵ちゅうちゅうあんに住んでいた俳人・種田山頭火と交流を深めます。山頭火は創刊に際して激励の手紙を送るなど、「詩園」の活動に声援を送っています。同年11月、山頭火が湯田温泉の風来居ふうらいきに転居してくると、同人たちはひんばんに風来居を訪れ、親しく飲み語り合いました。「詩園」の誌面では、「賛助」の筆頭に山頭火の名を挙げ、扉に句を掲げたり、山頭火の消息を掲載したりしています。

## 展示1 「詩園」創刊

昭和12年頃、山口の若い文学青年たちが集まり、「山口詩話会」を結成するなど文学活動が盛んになっていました。昭和13年7月には「山口県詩選」を刊行。同年9月、「山口詩話会」を発展解消し、同年9月に詩誌「詩園」を創刊。中也にあやかろうと、中也の一周忌を前に発行されたものでした。

展示1では、「詩園」創刊までの道のりと同人たちについて紹介しました。

## 展示2 「詩園」が目指したもの

「詩園」は昭和13年9月の創刊から昭和18年8月の終刊まで全27冊が確認されています。

展示4では、山頭火の書簡や句集などを展示し、「詩園」の同人たちと山頭火との交流について紹介しました。

【主な展示資料】「詩園」、詞華集山口県詩選、中原本中也原稿「夏と悲運」、中原呉郎詩集『煙の歌』、和田健詩集『生活の貌』かまわ、村田富久大詩集『朝の歌』、池原魚眠洞宛種田山頭火はがき、種田山頭火句集『孤寒』

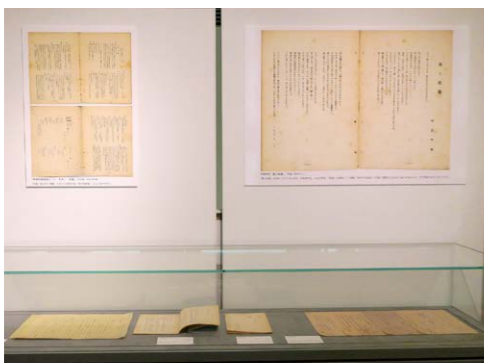
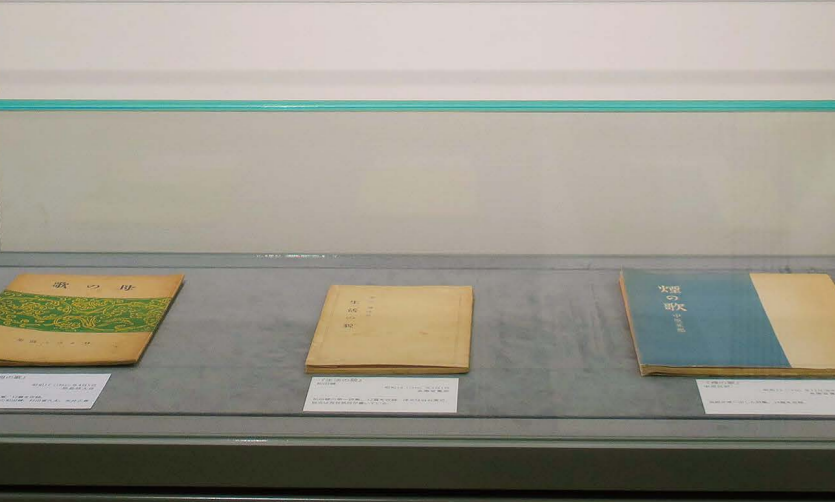
## 同人たちの詩集出版

同人たちの中には、誌上に詩を発表するだけでなく、個人詩集を出版する者もいました。

昭和13年に中原呉郎が『煙の歌』を刊行したのを皮切りに、昭和14年には、和田健『生活の貌』、長谷執持『進』、昭和17年上永井正『二十歳』、村田富久太『朝の歌』、林かほる『母の歌』といった詩集をそれぞれ刊行しています。



和田健『生活の貌』出版記念会（昭和14年3月18日）（和田健「山頭火もやま話」より）  
前列 右から3番目和田健 二列目 右端長谷執持、右から3番目矢野行隆





### 西川マリエ宛 献呈署名入り『山羊の歌』

この『山羊の歌』（限定番号第198部）は、中原中也が西川マリエに贈ったもので、表見返しに自筆の献呈署名（「拝呈 中也」）が書かれています。献呈先の名前は書かれていませんが、調査によりマリエに贈られたものであることが判明しています。

西川マリエは旧姓中原、中也の従叔母（大叔父の娘）にあたり、中也より17歳年長でカトリック信者でした。幼い頃は中也の実家で育ち、広島の母のもとで暮らすようになった後も中原家と交流。中也はマリエを「マリエ姉さん」と呼び親しんでいました。結婚して鎌倉に住んでいた時期に、同地に転居してきた晩年の中也と再会。教会に同行するなど交流が復活します。このときに中也から『山羊の歌』を贈られたと考えられています。



西川マリエ（後列左）、中也（後列中）と弟たち

この『山羊の歌』は、中原家の一員であり、中也がカトリックに寄せた深い関心に影響を与えたとされるマリエに宛て贈ったものであること、「拝呈 中也」という献呈署名は他の献呈本にはない唯一のものであることから、資料的に大変重要なものであるといえます。

同資料は、『山羊の歌』刊行を記念して設定した「山羊の日」（12月10日）に合わせ、12月1日〜12日の間、当館で特別展示を行いました。



### 谷崎潤一郎宛 献呈署名入り『山羊の歌』

この度、谷崎潤一郎宛献呈署名入り『山羊の歌』（限定番号第18部）が、大阪府豊中市在住の吉田弘孝氏より当館に寄贈されました。

谷崎潤一郎（1886―1965）は、「刺青」「痴人の愛」「細雪」などの小説で知られる文豪で、『山羊の歌』刊行当時は現在の兵庫県芦屋市に在住、「春琴抄」「文章読本」などで広汎な読者を獲得していた流行作家でもありました。

これまで存在を知られていなかった資料であり、中也が谷崎に『山羊の歌』を贈呈していたことが初めて明らかになりました。また、限定番号の18に着目すると、その前後に哲学者の谷川徹三宛（16）、フランス文学者の中島健蔵宛（19）、作家の志賀直哉宛（20）があることが確認されており、限定番号と贈呈先との関連も注目されます。

寄贈された吉田氏によれば、昭和30年代前半に大阪の古書店で購入。その際の店主の話によれば、谷崎が京都下鴨の潺湲亭を引き払って熱海に転居した際に処分した蔵書の中にあつたものということです。谷崎の潺湲亭売却は昭和31年12月ですので、その時期まで谷崎の元にあつたこととなります。



詩集山羊の歌奥付。著者中原中也 装幀者高村光太郎。発行者野々上慶一。東京市本郷区森川町八三。發兌文圃堂。東京市本郷区森川町八三。振替東京七六五〇三。印刷者小林鉦造。印刷昭和九年十二月五日。發行昭和九年十二月十日。頒價参圓五拾錢。著者檢印。限定二百部内百五十部頒布 第十八部

## 記念館ニュース

### 2021年7月1日〜12月31日 山口ゆめ回廊博覧会

山口県央連携都市圏域である七つの市町（山口市、宇部市、萩市、防府市、美祿市、山陽小野田市、島根県津和野町）でおこなわれる多様なイベントの集合体です。地域の美しい伝統・文化や自然、食などを紹介し、その魅力を全国に発信する事業です。



### 8月1日〜12月26日 山口ゆめ回廊博覧会 文学ラリー 「あなたの好奇心」駆発 山頭火・中也・鷗外をめぐる文学の旅へ！

山口・島根ゆかりの文学者である俳人・種田山頭火、詩人中原中也、作家森鷗外。それぞれの故郷を巡り、彼らをはぐくんだ街並みや空気をあじわいながら、まだ知らない山口の文学の魅力を見つめ直し、文学ラリーを開催しました。森鷗外記念館（島根県津和野町）、山頭火ふるさと館（防府市）、小郡文化資料館（山口市）、中原中也記念館（山口市）が連携し、入館してシールを集めると、チケットホルダーやランチョートなどノベルティがもらえます。延べ1100人以上が参加し、「この機会に初めて来館した」「楽しい企画をまた実施してほしい」などのお声をいただき、地域の文化施設で連携していく意義を見出した企画となりました。

### 10月9日・11月6日 山口ゆめ回廊博覧会 ゆめ散歩 「中原中也記念館・学芸員と巡る 湯田温泉ツアー」

10月、11月の2回にわたり、中也の故郷である湯田温泉にて、2時間ほどの「ゆめ散歩」を開催しました。

まず、生家跡に建つ記念館の展示を学芸員の解説付きでゆっくりと見学。その



後、井上公園に建つ「帰郷」詩碑や山頭火句碑を見たり、湯田の隠れスポットなどを発見しておしゃべりしたりしながら、ゆかりの地を散策しました。まち歩き後は、観光回遊拠点施設「狐の足あと」にて、山口の素材を活かしたスイーツ・ドリンクを堪能しました。

参加者からは「湯田温泉と文学とのつながりがよく分かった」「いろいろな発見があつて新鮮だった」といった声をいただき、湯田温泉の魅力に触れていただけた楽しいツアーとなりました。



- 2021年  
4月1日 特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続)  
当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
- 14日 企画展I「中也、この一篇——正午」  
(~7月25日)
- 23日 第200回 中原中也を読む会  
第26回中原中也賞受賞詩集 小島日和「水際」を読む
- 29日 生誕祭「空の下の朗読会」(湯田温泉ユウベルホテル松政)  
自由参加の朗読、浜田真理子ライブ(support:Marino[Sax])  
中也web朗読会(オンライン)  
中也または自作詩の朗読を動画でTwitter投稿
- 5月28日 第201回 中原中也を読む会  
屋外展示「虫の詩」(前期)——「蟬」「(月の光は音もなし)」を読む
- 6月25日 第202回 中原中也を読む会  
企画展I「中也、この一篇——正午」見学
- 7月23日 第203回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
三好達治の詩を読む
- 29日 特別企画展「書物の在る処——中也詩集とブックデザイン」  
(~9月26日)
- 8月1日 山口ゆめ回廊博覧会プログラム 文学ラリー(~12月26日)  
中原中也記念館、山口市小郡文化資料館、山頭火ふるさと館、森鷗外記念館
- 7日 特別企画展関連イベント  
オンライン座談会「中也詩集を装幀して」  
出演:カニエ・ナハ、岡本啓、ゾエ・シェレンバウム、鈴木啓二郎
- 22日 特別企画展関連イベント  
オンラインワークショップ「青山二郎の装幀術にまなんでみる」  
講師:カニエ・ナハ
- 27日 第204回 中原中也を読む会  
特別企画展見学
- 30日 新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館(~9月26日)
- 31日 機関誌「中原中也研究」第26号発行
- 9月11日 公開講演「中也の時代のリトルプレスとブックデザイン」(オンライン)  
講師:内堀弘 共催:中原中也の会
- 29日 企画展II「雑誌「詩園」——中也・山頭火と山口の文学青年たち」  
(~2022年4月17日)
- 10月9日 山口ゆめ回廊博覧会プログラム  
ゆめ散歩「中原中也記念館・学芸員と巡る湯田温泉ツアー」①
- 12日 中也忌関連イベント 中原中也へのメッセージ募集(~21日)
- 22日 中也忌  
メッセージお供え、職員による墓参
- 第205回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
中原中也命日企画 番音器で聴く中也ゆかりの音楽

- 10月23日 中也忌関連イベント メイシ交換 いろどりちゅうやわーど  
(~24日、オンライン)  
共催:山口県立大学「中原中也メイシ交換会」
- 27日 特別展示:第26回中原中也賞(~11月28日)
- 11月3日 特別企画展関連イベント  
ワイカムシネマ連携「本をめぐる映画特集」(~14日 YCAM)
- 6日 山口ゆめ回廊博覧会プログラム  
ゆめ散歩「中原中也記念館・学芸員と巡る湯田温泉ツアー」②  
第26回中原中也賞贈呈式(東京都・都市センターホテル)  
受賞詩集:小島日和「水際」  
主催:山口市
- 7日 特別企画展関連イベント  
ワイカムシネマ連携「本をめぐる映画特集」アフタートーク(YCAM)  
出演:広瀬奈々子、カニエ・ナハ
- 26日 第206回 中原中也を読む会  
企画展II見学
- 12月1日 山羊の日特別展示(~12日)  
西川マリエ宛 献呈署名入り『山羊の歌』
- 10日 第6回「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」  
入選作品展示(~2022年2月20日)
- 11日 第6回「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」  
(クリエイティブ・スペース赤れんが)  
表彰式・入選作品朗読会
- 24日 第207回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
福田百合子名誉館長と中也の詩を読む
- 2022年  
1月28日 第208回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
山口の詩人・吉田常夏の詩を読む
- 30日 「中也と遊ぶ、中也に学ぶ 詩のワークショップ」  
(湯田地域交流センター)  
講師:四元康祐
- 2月16日 第19回テーマ展示「中也の本棚——日本文学篇」(~2023年2月12日)  
特別展示(~27日)  
谷崎潤一郎宛 献呈署名入り『山羊の歌』
- 18日 開館28周年
- 25日 第209回 中原中也を読む会  
テーマ展示見学
- 3月1日 特別展示「二つの大震災と文学」(~27日)  
全国文学館協議会加盟館共同展  
「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画
- 25日 第210回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
屋外展示「虫の詩」(後期)——「一つのメルヘン」「虫の声」を読む
- 31日 館報第27号発行

中原中也の会

- 2021年  
5月16日 中原中也の会第24回研究会(オンライン)  
総司会:野坂昭雄  
研究発表  
発表者:武久真士、根来由紀、小林洋介  
講演「中也と神戸」  
講師:季村敏夫
- 7月31日 会報第50号発行
- 2022年  
2月15日 会報第51号発行

- 9月11日 中原中也の会第26回大会、第20回セミナー「中也とデザイン」  
(オンライン)  
総司会:権田浩美  
講演I「中也の時代のリトルプレスとブックデザイン」  
講師:内堀弘  
対談「中也賞詩人が考えるデザインのこと」  
出演:岡本 啓、三角みづ紀  
講演II「『書物の在る処』は何処か?」  
講師:カニエ・ナハ



「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第6回を迎え、396篇の応募作品の中からぼうしの詩人賞(最優秀賞) 1篇、優秀賞4篇、館長賞7篇が選ばれました。

今回も、クリエイティブ・スペース赤れんがでの表彰式、作品朗読会となりました。ぼうしの詩人賞には、中也がかぶっていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼ

第6回ぼうしの詩人賞  
~あつまれ! 未来の中也たち!~

「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第6回を迎え、396篇の応募作品の中からぼうしの詩人賞(最優秀賞) 1篇、優秀賞4篇、館長賞7篇が選ばれました。

今回も、クリエイティブ・スペース赤れんがでの表彰式、作品朗読会となりました。ぼうしの詩人賞には、中也がかぶっていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼ

ぼうしの詩人賞(最優秀賞)

「とどいたベッド」 下野 紗英

優秀賞

「夏休みのソナチネ」 阿武 一華  
「あめだま。」 仲田 睦都  
「皆既日食」 高橋 涼大  
「川」 藤井 春花

館長賞

「ウチの家は、  
「ゴハン」がうまい!!」 小田村 晃希  
「だいすき」 水津 万桜華  
「おりがみ」 水津 百桃香  
「いもうとがうまれたよ。」 田淵 陽仁  
「Q」 永瀬 羽優磨  
「2021、夏」 濱田 さくら  
「仮面」 吉近 実音

※記念館WEBページにて、過去の入選作品をご覧いただけます。

中也と遊ぶ、中也に学ぶ  
詩のワークショップ

詩人の四元康祐氏を講師に迎えて、大人向け詩の創作ワークショップ第三弾となる「中也と遊ぶ、中也に学ぶ 詩のワークショップ」を令和4年1月30日(日)に開催しました(会場:湯田地域交流センター)。

中也の詩「骨」をさまざまな手法で「仕立てなおす」という内容で、朗読や中原家累代之墓近辺の情景を撮影した動画などを通じて「骨」を鑑賞し、骨に関する言葉や他ジャンルの作品に登場する骨のイメージを確かめ、自分なりの「骨」を創作し、自作朗読して講師のコメントを聞くという四部構成で展開されました。

6名の参加者はその場で詩作に取り組み、四元氏との対話を楽しみました。また、その様子はウェブ



ブ会議ツールで同時中継され、34名のオンライン参加者のうち11名がメールで作品を提出され、後日四元氏にコメントをいただきました。

## 第27回中原中也賞

### 『たましいの移動』

くにまつ えり  
國松 絵梨 氏



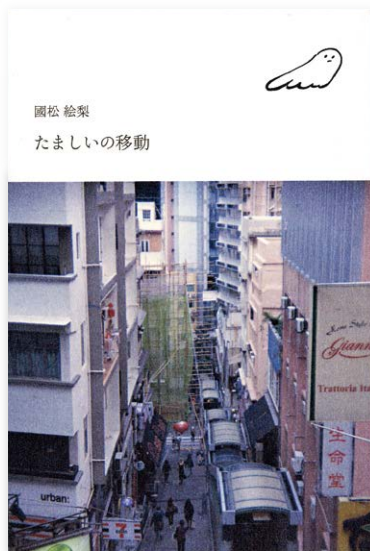
**第27** 回の中原中也賞は、公募および推薦による218詩集の中から、國松絵梨氏の『たましいの移動』（七月堂）が選ばれました。

國松絵梨氏は平成9年生まれの24歳（受賞時）で慶應義塾大学大学院文学研究科在学中。同大学文学部在学中に受講した詩の創作の講義をきっかけに詩作を始め、表題作を含む32篇の詩を収めた詩集『たましいの移動』をインカレポエトリ叢書シリーズの一冊として刊行し、今回の受賞に至りました。

國松詩集（『たましいの移動』）は現在の若者がこの世界を取り扱うとき、健康的で最も素直な報告とも言える作品。（中略）國松詩集が持つ構成員は、読者を次第に、自分にも書ける、と思わせるような広がりがある。自らを途中経過とした自覚と今後の可能性に期待して、中原中也賞に決定した。（「選評」より）

ぬけだしてきた  
とりのこされたような夜だった 岩肌が  
しずかに波になでられていて なんだ 月が  
こんなに明るいなんて思わなかった  
このまま このまま 少し離れた声は朝を待っている  
もっと遠くの声も もっともっと遠くも待っている 朝を待っている  
朝日は等しい そんなこと忘れてる まいにち新しく思い出す もっと遠くの朝  
手元にある光は燃えている 燃えていた もう 燃えていない  
水辺はずかしい 海辺はたよりないようにすずしい  
とりのこされたような早朝 まちくたびれたいきをはきだす とりのこされている  
そんなことはまたあたらしい光にふれてしまう きえてしまう しめった朝  
少ししたら壁のような雨がふる  
おなががすきはじめる

（「朝をぬける」）



Nakahara  
Chūya  
prize 27<sup>th</sup>

### 2022(令和4)年度 記念館事業・関連行事予定

2022年4月 - 2023年3月

展示	イベント・記念日	中原中也を読む会
企画展Ⅱ 「雑誌『詩園』——中也・山頭火と山口の文学青年たち」 (2021年9月29日～2022年4月17日)	湯田温泉 白狐まつり (4月2日、3日)〈無料開館日〉	毎月 第4金曜 中原中也記念館ほか
第19回テーマ展示 「中也の本棚——日本文学篇」 (2月16日～2023年2月12日)	生誕祭 空の下の朗読会 (4月29日 中原中也記念館前庭)〈無料開館日〉	中原中也の会 中原中也の会第25回研究集会 (5月22日 國學院大学院友会館)
企画展Ⅰ 「中也の住んだ町——幼少期」 (4月20日～7月24日)	中也忌 (10月22日)〈無料開館日〉	中原中也の会第27回大会 (9月17日 湯田温泉ユウベルホテル松政)
特別企画展 「坂口安吾と中原中也——風と空と」 (7月28日～10月2日)	山羊の日(第1詩集『山羊の歌』刊行日) (12月10日)	中原中也の会第21回セミナー (9月18日 湯田温泉ユウベルホテル松政、 中原中也記念館)
企画展Ⅱ 「中也、この一篇——『一つのメルヘン』」 (10月5日～2023年4月16日)	開館29周年 (2023年2月18日)〈無料開館日〉	※日程変更や中止の場合もございます。
第20回テーマ展示 「『山羊の歌』(仮)」 (2023年2月15日～2024年2月中旬)		